

古賀未来は勇者である

鈴野

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦2015年 7月30日

突如、現れた人類の敵「バーテックス」

バーテックスの襲来により、人類は絶滅の危機。

だが、バーテックスに対抗できる能力を持った者がいた。

それが、「勇者」である。

勇者となった、古賀未来は復讐の為に人類の敵バーテックスと戦うことを誓う。

この物語は、復讐に燃える少女の成長の物語である。

第一話 思い出

目次

1

第一話 思い出

ー ー 種を植え、芽が出て、蕾になる

そして、可憐な花となる ー ー

ー ー だが、育て方を間違えると、花は育たない ー ー

2015年 6月10日

五月蠅いアラームの音を止め、むくりと起き上がる。ゆっくりと身体を起き上げ、ベットから降りる。覚束ない足取りで、クローゼットの方へ向かう。

クローゼットに着いたら、着ている服を脱ぎ捨て床に落とす。

クローゼットを開き、制服を手取る。

制服からハンガーを取り、片手で制服を持ちながらハンガーをクローゼットの方に戻す。

片手で持っている服に着替える。着替え終え、クローゼットを閉める。

床に落ちている服を拾い上げ、自室を出る。

欠伸をしながら階段を降り、洗面所へ向かう。

洗濯機の中に持っていた服を入れて、洗面器の方へ身体を向ける。

洗面器の近くにコップが置いてあり、コップの中には歯ブラシがある。

歯ブラシを取り、歯みがき粉を付ける。

一通り磨き終わったら水を口に含み、一緒に吐き出す。

近くにあるタオルで口を拭き、鏡を見る。

髪の毛がはねていないか、確認をしてから洗面所から出る。

ダイニングへ向かう途中に、美味しいそうな匂いが漂う。

美味しいそうな匂いに釣られ、扉を開ける。

「おはよう、未来」

母の挨拶が聞こえてきた。

「おはよう、母さん」

ワンテンポ遅れて、挨拶を返す。

辺りを見渡す。

何時もはリビングでテレビを見ている父がいないことに気が付く。

「母さん、父さんは、？」

取り敢えず母に聞いてみる。

「あの人なら、」今日は早く起きないと遅刻する、とか言っていて、慌てて出ていったわ」

朝食を運びながら、クスクスつと笑いながら話す母。

笑っている母を見ていると、こっちまで笑顔になってしまう。

「早く席について、早く食べましょう」

朝食を運び終えた母がそう言う。

「うん、母さん」

返事を返しながら、席に座る。

「いただきます」

母と声を合わせながら言う。

そこからは他愛のない会話をする。けど、この何気ない会話が大好きだ。

穏やかに時間が進み、朝食を食べ終える。

「ごちそうさま」

ここでも、声を揃える。

席を立ち上がり、空になった食器を持ち、キッチンへ持っていく。着いたら、食器を置き、軽く水に浸ける。

ダイニングに行き、前日に用意してある鞆を持ち、玄関に向かう。

「忘れ物はないわね」

忘れ物がないか聞いてくる。

「大丈夫だよ、母さん」

返事を返しながら、靴を履く。

「じゃあ、行ってらっしゃい」

静かな声で見送ってくれる母。

「うん、行ってきます」

微笑みながら、返事を返す。

扉を開けて、外へ出る。

—————何気ない一日が始まる。

外に出ると、暑い風と眩しい陽射しが出迎えてくれる。だが、馴れてしまえば暑いとは思わない。

そんなことを考えているよりも、待ち合わせ場所に行かなくてはならない。

時間には余裕があるが、もしも、彼女が早く着いていたら待たせる訳にいかない。

少し早足で、待ち合わせ場所に向かう。

待ち合わせ場所に着くが、彼女の姿はない。

心の中で、ほっとする。

近くにあるベンチに座る。

息を調える。

彼女が来るまで、何をしようか考える。

が、その必要はなくなった。

「お〜い、み〜ら〜い〜」

彼女も早く来たようで手を振りながら、こっちに走ってくる。

彼女の名前は芝月加古。

幼稚園からの付き合いで、私の親友でもある。

「ごめん、待った?」

息が上がりながら、聞いてくる。

「大丈夫だよ、私もさっき来たから」

ベンチから立ち上がり、いつもの会話をする。

この会話をしてから、加古との日常が始まる。

加古は息を調べてから言葉にする。

「じゃあ、出発!」

加古の元気な号令で、歩き始める。

「もうすぐで、夏休みだね! 未来は夏休みなにする?」

歩き始めると同時に、聞いてくる。

「,,, 何しようかな?」

曖昧な感じで答える。

「私はもう決まっているんだよ! まずね、未来と遊んで、未来と一緒に

にテレビを見て、料理したり、色々あるだよ！」

「ちゃんと、宿題もやらないとね」

そんなことを言うと、加古は嫌な顔をした。

「が、がんばるよ〜」

「覇気のない声で答える加古。」

そこからは二人で笑いながら歩く。

学校に着き、下駄箱で靴を履き替えて、加古と一緒に教室に行く。

教室の扉を開けて、自分の席に座る。

加古も、私の後ろの席に座る。

鞆から教科書やノートを取り出し、机の中にしまう。

しまうと同時に、加古が後ろから抱き着いてきた。

「今日の分の、未来成分を補充しないと〜」

訳がわからないことを言うと、ぎゅっと強く抱き締めてくる。

何時も抱き着いてくるので、そんなに気にならなくなった。

「いや〜、朝からアツアツだね〜」

横から言ってくるのは、相葉美樹。

今年の春から仲良くなった私の友達。

「おはよう、美樹」

「あつ、みきたんだ〜、おはよう〜」

私が挨拶をした後に、加古も挨拶をする。

「はいはい、おはよう」

「流すように挨拶をする。」

「毎日思うんだけど、暑くないの」

手を扇ぎながら、聞いてくる。

「全然暑くないよ〜、逆にこうすると、すぐく力がわいてくるよ！」

元気に答える。

「私も大丈夫かな、もう馴れたから」

普通に答える。

「あ〜、ごめん、聞いた私がバカだったわ」

は〜っと溜め息を吐きながら、呆れていた。

キーンコーンカーンコーンつと予鈴が鳴る。

「んじや、私は席に戻るわ」

そう言うと、踵を返して、自分の席に戻っていく。

「もつと補充したかったのに、」

不機嫌そうに、後ろの席に戻る。

「ねえ、後で補充してもいい、？」

泣きそうな顔で聞いてくる。

少し考えた後で、言う。

「いいよ、また後でね」

私が言うと、加古は泣きそうな顔から、嬉しそうな顔になった。

私は、加古の嬉しそうな顔見た後に前を向く。

私はふっと思う。

「……………」 ああ、本当に楽しい毎日だな。……………」

だが、平穏な毎日は少しずつ、崩れていく……………」